

けとはいえない。

5. 結び

以上に述べたことをまとめてモデル的に示すと次のようになる。

①日出後、陸地面が急速に加熱されるに伴ない、鹿島灘沿岸に海風が吹き始める。これと同時に北浦などの湖風が起り海風の内陸への進入は一時抑えられる(第10図①)

②1時間程度で海風が湖風の抵抗を打破して内陸へ進入する。霞ヶ浦の西方では海風に先立って霞ヶ浦の湖風が観測される場合がある(第10図②)

③鹿島の海岸から約40kmのE₇地点に海風が到達するころには鹿島灘からの海風は九十九里浜の海風と結合して、風向が南よりに変化する(第10図③)。九十九里浜の海風が強い場合には鹿島からE₇地点までに及ぶ広い地域で風向が南に急変する(第10図③')。海風発達の初期にはその風向は海岸線に直角であるが、海風の発達とともに局所的な特徴は地面近くに限られ、全体としては太平洋と関東平野というスケールの大きな海陸対比に対応する南寄りの風に発展するものと考えられる。菊地と伊藤(1974)によると房総半島西岸では夏季の大気汚染の高濃度日に反時計まわりの風向変化が見られる。海陸分布が鹿島地域と逆であることを考えれば、これも上述の海風発達過程で説明できるとと思われる。

鹿島灘海風の発達形態について以上のような概要がほぼ明らかになった。なお、そのときの気温の鉛直構造に関する観測例を吉門ほか(1975)において考察した。

しかしここに述べた調査の範囲は未だごく限られたものであり、残された課題は多い。北浦などの湖風の構造、海風との関係は大いに検討の余地がある。湖風によって海風の前線が停滞する傾向があるとすれば、それが鹿島地域の大气汚染にどの程度の影響を与えるかも考慮する必要がある。また九十九里浜の海風の関連性について述べる以上、鹿島地域と並行して九十九里浜方面でも調査を行なう必要がある。海風の風向変化のタイプが日によって異なることについては総観の気象状況との関連を追跡する必要があると思われるが、それは稿を改めて検討したい。

終りに、地上風データの使用にあたって茨城県公害技術センター大気部長海老沢栄二氏ならびに県環境局大気保全課の御協力をいただいたことを記し、心から感謝致します。なお上層風の測定は公害資源研究所公害第1部第1課の研究員諸氏の協力によって行なわれました。

文 献

- 河村 武, 1974: 関東平野南部における地上風系, 日本気象学会1974年度春季大会講演予稿集, 45.
 菊地立, 伊藤昭治, 1974: 局地風系と大気汚染(第1報)——光化学スモッグによる植物被害の地域性に関する気象解析, 千葉県公害研究所研究報告, 2, 17-31.
 斎藤哲史, 泉水菊夫, 岡部真一, 1975: 上層風の構造とオキシダント高濃度——市原地区, 千葉県公害研究所研究報告, 3, 69-79.
 吉門洋, 蒲生稔, 横山長之, 1975: 鹿島灘からの海風の広域観測, 公害, 10, 227-235.

会員名簿の改訂について

日本気象学会では、2年毎に4月1日現在で会員名簿を改訂しており、本年が改訂の年に当ります。今回から各会員の住所変更届にもついで名簿を改訂することになりました。住所、勤務先等変更のあった方及び近く変更予定の方は、本号はさみ込みの葉書を用いて4月10日までに学会事務局へ必ずお知らせ下さい。

変更手続きをしないと、会誌等は、旧住所に送付されますので御注意下さい。